

宮沢賢治の共生観と自然環境

並松信久

[要旨] 宮沢賢治(1896-1933, 以下は賢治)は数多くの詩や童話を創作しているが、数多くの作品に共通してみられるのは、自然と人間の関係である。その関係は賢治の自然観察や農業実践によって培われた。さらに作品の創作過程で、進化論や生態学という欧米の思想の影響を受けた。しかし、作品は単に欧米思想をわかりやすく説明したものではなく、賢治の独創性あるいは先駆性がみられるものであった。

代表的な作品をたどれば、賢治による自然と人間の共生観には、人間生活を包摂した生態系が強く意識されていたことがわかる。自然保護思想のひとつであるディープエコロジーでは、環境保護を優先するあまり、生活レベルを極端に下げることが提唱している。それとは異なり、賢治は生態系を維持できる範囲内で人間生活を考えていくという構想がみられる。賢治の作品では、人間は時として乱開発などの失敗を犯すものの、いずれ自然との相互依存関係で修復していくとされる。

(キーワード傍線部分)

目次

- | | |
|----------|-----------|
| 1 はじめに | 2 自然と進化 |
| 3 野性と文明 | 4 食物連鎖と農耕 |
| 5 生態系と科学 | 6 共生空間の形成 |
| 7 結びにかえて | |

1 はじめに

宮沢賢治（1896-1933, 以下は賢治）は数多くの詩や童話を創作し、今なお多くの読者を魅了している。数多くの作品に共通してみられるのは、自然と人間の関係である。その関係が顕著に現われているのが、農業に対する姿勢である。賢治と同様、大正期・昭和初期に農業に関心に向け、農民への奉仕活動に従事した知識人は数多くいる。たとえば、内村鑑三（1861-1930）、武者小路実篤（1885-1976、以下は武者小路）らである⁽¹⁾。文学作品の執筆であれば、長塚節（1879-1915）、有島武郎（1878-1923、以下は有島）、島木健作（1903-1945）⁽²⁾ からも含まれる。しかしながら、これら多くの知識人のなかで、高等教育機関（旧盛岡高等農林学校）で農学を学び、農業を実践したのは、賢治だけである（有島は札幌農学校出身であるが、卒業後は農学や農業とほとんど関係をもっていない。逆に武者小路は農学教育を受けていないが、「新しき村」を創設するなど実践に関わっている）。農学の勉学と農業実践のいずれかを行なった知識人は、他にも数多くいるが、大正期・昭和初期で農学の学びと農業の実践を行なったのは賢治だけであった。

賢治の数多くの作品の執筆活動と農業実践というテーマは、これまで賢治研究の中で大きな位置を占めてきた。賢治が農業の実践や指導を行なったことは、多くの賢治研究が触れ、すでに論じ尽くされた感がある。その代表的な研究は、大島丈志『宮沢賢治の農業と文学—苛酷な大地イーハトーブの中で』（蒼丘書林、2013年）であり、賢治の文学と農業との関連を詳細に解明している。しかしこの大島氏自身も、「賢治作品と農村・農業という視座では、そのかわりの深さに比例して十分に研究が重ねられているとは言い難く、まだ解明すべき問題が残されている⁽³⁾」と指摘している。本稿は、大島氏の問題意識の延長上に位置するものであるが、農学の適用や農業指導という点については、すでに前稿で明らかにした。前稿では行政主導の農業と賢治の理想とする農業は異なっていたと考えられ、その狭間で賢治が試行錯誤を繰り返

し、成果があがらず葛藤していたこと、さらにその葛藤から多くの作品が生み出されたことを明らかにした⁽⁴⁾。本稿も賢治の作品に注目する点は同様であるが、その背景にあった農学や農業指導という面だけでなく、広く自然と人間の関係をどのようにとらえ、描いていたのかを考えていきたい。

自然と人間の関係という点で、賢治の作品に関する注目すべき書評が、作品刊行直後に出されている。賢治が1924(大正13)年に自費出版した詩集『春と修羅』は、生前ほとんど注目されなかったが、出版時に書評が二つ出されている。一つは、ダダイズム詩人の辻潤(1884-1944)による書評で、『読売新聞』(1924年7月23日付・24日付)の文芸欄に掲載され、好意的なものであった。もう一つは、詩人の佐藤惣之助(1890-1942、以下は佐藤)が『日本詩人』誌の1924年12月号に載せた一文であり、特異性をもっていると称えている。佐藤はその特異な点について、「それに『春と修羅』、この詩集はいちばん僕を驚かした。何故なら彼は詩壇に流布されてゐる一個の詩葉も所有してゐない。否、かつて文学書に現はれた一聯の語藻をも持つてはゐない。彼は気象学、鉱物学、植物学、地質学で詩を書いた。奇厚、冷徹、その類を見ない⁽⁵⁾」と述べる。すなわち、当時の文学界ではアピールしないであろう特異な点は、賢治の科学的な表現であるとした。つまり、詩集には人間の感情だけでなく、「自然(科学)」が大きく入り込んでいることを指摘した。

佐藤の書評は、やや逆説的であるものの、賢治がなぜ小説を書かなかったのかという疑問へとつながる。周知のように、賢治は多くの詩と童話を残した。しかし、なぜか小説は執筆していない。賢治は文学の表現形式のなかで、小説が最も楽に書けるとみなしていたにもかかわらず、小説を執筆しなかった。賢治の物語(主に詩や童話)には、描かれる人間もまた、動植物の装いを帯びている。つまり、賢治は主役を人間に限ってしまう小説を拒否したかのように見える。結局、賢治の作品は人間と自然によって組み立てられていると考えられる。

一方、農村活動では、賢治は自らの無力さに打ちのめされることが多かった。

しかし、それこそが賢治を創作や信仰へと駆り立てる原動力となった。しかもこの葛藤は内省的に進んだために、優れた作品群を生み出す大きなきっかけとなった。さらに賢治自身の意思に反して、生前、文筆家として注目されなかったことも幸いした。なぜなら、さまざまな葛藤を抱え続けることができたからである。賢治は文筆家という「逃げ場」を失っていたため、精神的に追い詰められたにもかかわらず、作品の表現はより直接的でわかりやすいものとなった。葛藤は複雑であったが、表現を簡潔にわかりやすいものにしようとするれば、詩や童話という形態をとらざるを得なかったと考えられる。さらに賢治は自然・文化・人間を一体化し、詩と童話を綴った。言い換えれば、賢治は作品を通じて、自然との付き合い方を示した。⁽⁶⁾本稿では農業実践やそこから生じる葛藤を通して、人間と自然との共生観をもち、独特な自然観が形成されていった過程を考察していく。これは賢治独特の生態学的な視点の形成過程の考察ともいえる。

賢治の生態学的な視点については、すでにグレゴリー・ガリー著／佐復秀樹訳『宮澤賢治とディープエコロジー：見えないもののリアリズム』（平凡社ライブラリー、2014年）が明らかにしている。そこでは、道徳や倫理も含めた生態学的な思考の先駆的な形態が、賢治の作品にはあるとしている。確かに自然界に対する賢治の姿勢は、ディープエコロジー（deep ecology）の先駆といえる面がある。⁽⁷⁾ディープエコロジーが提唱していることと賢治の作品の特徴は重なりが多いとみえる。しかしながら、異なる点もある。たとえば、ディープエコロジーは人間の内面性・精神性・全体性を強調するあまり、現実世界からの逃避を正当化してしまう可能性を秘め、人間中心主義を仮想敵にし、自然保護を訴えるという面をもっている。この点、賢治の作品には内面性・精神性・全体性などの特徴がみられるが、むしろディープエコロジーのいう「生命圏平等主義」⁽⁸⁾が貫かれ、いくぶん楽観的ではあるものの、人間中心主義の行動による影響が、自然環境をどのように「修復」していくのが説かれている。

現在の環境問題を考える場合、どちらかという、賢治の考え方のほうが参考になる。なぜなら、賢治の考えのほうが、人間生活を包摂した生態系が強く意識されているからである。ディープエコロジーは、環境保護を優先するあまり、先進国の生活レベルを極端に下げることが提唱している。この点、賢治は生態系を維持できる範囲で人間生活を考えていこうとする方向性を持ち、人間は時として乱開発などの失敗を犯すものの、いずれ自然との相互関係で修復していくとされる。

本稿では、このような賢治の思考を、主に賢治の童話をたどりながら考えていくことにする。以下では、「自然と進化」において、賢治が欧米で起こった生態学と、日本流に解釈された進化論の影響を受けたことを明らかにする。次に「野性と文明」、「食物連鎖と経済」、「生態系と科学」、「共生空間」の形成の順に、それぞれ賢治の捉え方と、生態学や進化論、ディープエコロジーの考え方と比較し、賢治の独創性を明らかにしていく。

なお、本文中の動植物名は、できるだけ賢治の作品に忠実に表記するが、漢字とカタカナの表記が混在している場合がある。また本文中では「自然」と「野性」という言葉が混在している。文脈のなかで区別をつけていない箇所もあるが、基本的には自然は人間を含み、野性は人間を含んでいないという意味で使用している。さらに本稿の引用文などには、不適切な表現が含まれている部分があるが、元資料を重視する立場から、あえて訂正を加えていない。さらに引用文中の句読点については、読みやすくするために一部、筆者が付け加えた部分がある。また人物の生没年に関しては、わかる範囲で記した。

2 自然と進化

賢治の作品の多くは、1930年代の「生態系」概念を暗示しているものであった。生態系という言葉は、1935年に植物学者アーサー・タンズリー (Arthur G. Tansley, 1871-1955) によってつくられた。生態系は、「有機体の複雑な集まり」

だけでなく、「全体としての宇宙から原子に至るまでの範囲をもつ、宇宙の多数の物質的体系⁽⁹⁾」を意味した。さらに賢治の作品は、単に生態系を意識させるものであったというだけではない。ディープエコロジーの主唱者であるノルウエーの哲学者アルネ・ネス (Arne Naess, 1912-2009) が、世界のなかの人間の位置付け (ネスはこの世界におけるエコロジカルな人間存在のあり方という) について、倫理的な側面を説き、「エコソフィ」(エコロジーとフィロソフィとの合成語) という概念を生み出している点と、かなり類似している⁽¹⁰⁾。エコソフィは一般にエコロジカルな調和と均衡に関する哲学体系とされるが、賢治の作品も自然のなかの人間を意識したものが多く、作品のなかには動植物が擬人化された童話も数多くある⁽¹¹⁾。賢治の場合、哲学体系をめざしたといえないまでも、生態系を意識した独特の世界観が展開されている⁽¹²⁾。

ところで、生態学 (ecology) という言葉は、生物学者エルンスト・ヘッケル (Ernst Heinrich Philipp August Haeckel, 1834-1919) によって 1866 年に生み出されたが、欧米でも日本でも 1890 年代以前には、一般に使われていなかった言葉である。economy から派生した ecology は、自然全般を抽象的で巨大な体系として描き、生命体が生存する具体的な場を表わすものとされた。ヘッケルは、「生態学という言葉で、われわれは自然という機構 economy に関する一群の知識 (有機的および非有機的環境に対する動物の全体的関係に関する研究) を意味している⁽¹³⁾」と記している。

ヘッケルの著書『生命の不可思議』は、1904 (明治 37) 年に日本で翻訳され、とくにマルクス主義者による唯物論をめぐる論争において利用された⁽¹⁴⁾。賢治は 1913 (大正 2) 年にこの書籍を読んだようであり、詩「青森挽歌」のなかで、さらに童話「ビヂテリアン大祭」のなかでも、ヘッケルの名前に触れている⁽¹⁵⁾。もっとも、賢治の作品では、生態学やヘッケルに触れるだけでなく、すでに生態学的にみて独特の表現が使われている。その典型的な描写は、童話集『注文の多い料理店』(1924 年) にみられる⁽¹⁶⁾。この童話集に収められた九つの物語は、人間活動 (耕作・建築・購入・販売など) の世界と、人の手が入って

いない世界との境界領域でしか起こりえない数々の出会いを主題として取り上げている。『注文の多い料理店』に収められた物語では、自然と人間との境界領域において山猫はハンターに対し、食物連鎖におけるハンターの位置を思い出させ（「注文の多い料理店」、柏林は軽率な木こりに対する裁判を開き（「かしはばやしの夜」、さらに鹿の集団は侵入してきた農夫との関係が始まったことを示すために、奇妙な儀式^{ししをど}を始める（「鹿踊りのはじまり」）。

こうした物語は、それまで想定しなかった「自然からの視点」で描かれている。⁽¹⁷⁾たとえば、『注文の多い料理店』のなかの物語のひとつ「狼森^{オイノもり}と笨森^{ざるもり}、^{ぬすともり}盗森」では、人間が落とした手ぬぐいを見つけた野生の鹿の経験、あるいは原野に人が入植し始めるのを目撃する巖^{いわお}の経験、そして電信線を通る電気エネルギー（賢治の世界においては自然のひとつ）の経験などが描かれている。こうした自然からの視点は、童話の体裁をとっているもので、現実の忠実な描写ではないものの、抽象的に想像しうる人間と自然の関係を全体的にとらえやすくしている。人間と森の関係、あるいは野生動物に向けられた資本主義の脅威などの問題を映し出している。まさに現在の環境問題に通じる面をもっていたといえる。賢治は童話という体裁をとることによって、人間の視点からではなく、自然の視点からそれを描くことができた。

ところでヘッケルは、生態学という学問自体を創始したわけではない。ただ生態学的な現象を厳密に説明する名称をつくり出したにすぎない。西欧では博物学をはじめとして、生態学的研究がすでに行なわれていたからである。⁽¹⁸⁾生態学は対象とする範囲が広いと、その議論の対象は形而上学の領域にまで及んでいた（economy も含まれた）。ヘッケルは生物と環境の相互依存性の研究に、科学的な厳密さをもち込んだ。ヘッケルは1869年の講義において、生態学という新しい学問には二つの特徴があるとした。すなわち、一つは地球上の全生命体は「単一の経済単位」を構成しているということである。これは概念としては新しいものではなかったが、この全体論（holism）的な考え方は、やがて20世紀において、さまざまな解釈を経て、全体性を強調する

論拠となつていった。⁽¹⁹⁾すなわち、全体主義につながる有機体論的な見方となつた。⁽²⁰⁾

ヘッケルの研究はやがて社会進化論の影響を受け、ドイツのファシズム運動とも結びついた。⁽²¹⁾しかし、このイデオロギーとしての展開は、ヘッケルの意図に反したものであった。ヘッケルは元々、生態学とダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) の進化論を結び付けようと試みていたので、イデオロギー的な側面を強調する意図はなかったからである。ヘッケルは、生態学研究はダーウィンの進化論という枠組みのなかで、その真価を発揮すると説明し、人間も自然界を構成する一生物にすぎないと考えた。これによって、生態学は人間中心の世界観から、生物中心的方法をとることになった。しかし、生物中心主義という言葉は、その有効性が限定される。すなわち、言葉の上では生物中心主義は人間中心主義との対立を単に強調するだけにすぎず、中心主義という言葉は、内容における本質的な違いを表現するものではなかったからである。したがって、対立を強調するものの、むしろ何が中心であるかはわからないということになった。

日本では1870年代にアメリカの動物学者でお雇い外国人であったエドワード・モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) によって、進化論が紹介された。しかし、日本では進化論は生物学上の学説というよりも、社会的な人間の生存競争との結びつきが強調された。歴史学のジュリア・アデニー・トーマス (Julia Adeney Thomas) によれば、明治期日本ではハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) による社会進化論が大きな影響を与え、「19世紀末における西洋から日本への最大の知的輸出品」とされる。⁽²²⁾結局、明治期の知識人は、進化論を純粋な生物学的理論として受容したのでなく、スペンサーによる社会的な進化が受け入れられ、それが近代化への進歩イデオロギーであると考えた。そのために社会進化論とダーウィン進化論を混同して受容している状態であつた。⁽²³⁾

しかし、日本の生物学研究においてダーウィン進化論の影響が、まったく

なかったわけではない。ダーウィンの著書の翻訳が紹介され、それが日本の生物学に影響を与えた。ダーウィンの進化論は、石川千代松（1860-1935）や丘浅次郎（1868-1944、以下は丘）らの学者によって翻訳された⁽²⁴⁾。この丘の著書『進化論講話』（開成館、1904年）を1912（明治45）年に読んだ賢治は、この著書を通じて進化論に興味をもった⁽²⁵⁾。丘による『進化論講話』と、丘が人類の絶滅は不可避であると紹介した著書『人類之過去現在及未来』（日本學術普及會、1925年）は、いずれも人間の命の儻さを強調するものであった。この著書の影響を受けた賢治は、進化という概念と「無常」という仏教的な概念とを結びつけた。

さらに丘は1912（明治45）年に「人類の征服に対する自然の復讐」という論文を『中央公論』誌に発表した。この論文で丘は、スペンサーによる社会的・政治的支配のための生存競争と、ダーウィンによる有機体と非有機体との密接な相互依存には、矛盾があると主張した。丘は「文明とは自然を征服することである」と述べたうえで、自然の世界は直接的な人間の必要性を超えた「理法」に従っていると考えた。丘は、農工業の拡大という近代文明の脈絡において、自然は洪水・疫病・汚染によって復讐してきたと述べる⁽²⁶⁾。この論文は進歩の生態学的な影響を、自業自得という原則に基づいて説明しているが、人間と自然の関係について、根本的な結論が出されたというわけではなかった。丘は、

若し研究を怠り、努力を休んで、自然の征服を努めずに居たならば、自然の復讐を受けることは、或いは軽く済むかも知れぬが、その代はり忽ち他の民族に征服せられ圧伏せられて、更に苦しい位置に落ちねばならぬ⁽²⁷⁾。

と語り、結局、人間中心的な進歩という視点で論文を締め括っている。日本では進化論に反論するユダヤ・キリスト教的伝統がなかったうえに、進化論に対する嫌悪や抵抗がほとんどなかった。しかし、そうであるからといって、逆に進化論に全く関心がなかったわけではなかった。むしろ近代日本で新たな

に確立された政治的・商業的諸制度の理念（中央集権化・物象化など）に対し、進化論は大きな影響を与えた。

ダーウィンによる自然と人間に関する考察の特徴は、自然界の中心から人間を外すことで、自然界はどのような有機体も支配していないと同時に、独自に存在もしていないと認識したことであった。さらに18世紀以降、博物学を研究する際にみられたことであったが、直線的な時間の重要性を強調する一方で、通時的な考察によって、目的論的な偏見を取り去ったこと⁽²⁸⁾であった。すなわち、ダーウィンは自然界の共時的構造を概念化し直したといえる。ここから当時の進歩概念のなかに自然淘汰と相互依存関係（たとえば、食物網の構造）の概念がもち込まれた。これは後に、生態学者が「生態的地位(niche)」⁽²⁹⁾とよぶ概念につながるものとなった。

ダーウィンの著書『種の起源』は、「生存競争における有利な種族の存続」という副題が付いている。しかし副題から受けるイメージに反し、根本的には相互依存の論理に依っていた。もっとも、ダーウィンは生存競争という概念について、「自然の等級においては、かけ離れた動物と植物が複雑な諸関係の網によって、ひとまとめにされている⁽³⁰⁾」と述べている。これは仏教的な宇宙観を想起させ、法華経がいう「形あるものも形なきものも、意識あるものも意識なきものも」（有形、無形、有想、無想）やすべての生き物の「総計」（六趣四生衆生）などを想起させるものであった。ダーウィンは、「すべての生命は相互に関連していて、この体系の中では人間に特権は与えられておらず、一見無意味なように思える有機体でも、全体の構造にとっては重要である」と述べ、宇宙は中心のない世界であり、階層秩序は視点によって異なるものであると考える。ダーウィンによれば、「高等とか下等とかいう言葉を使うべきではない⁽³¹⁾」とされている。

このようなダーウィンの考え方と、法華経から影響を受けた賢治の童話は、当然、類似性をもちえた。⁽³²⁾賢治の童話「狼森と笹森、盗森」（以下では「狼森」と略す）が、人間文化とそれを支える自然の世界との関係を描いた作品であ

るとすれば、ダーウィンによる自然の仕組みに関する基本的な考察を反映していたとも考えられる。ダーウィンは自然を競争と相互依存をともなう生存の場として描き、ダーウィンの世界は宇宙の単一性ではなく、闘争と協働に基礎を置いたものであった。したがって、ダーウィンによれば自然との闘いは、別の視点からみれば協働にもなり、この点で丘の「自然の征服」とは異なっていた。

賢治の童話「狼森」は、盛岡近郊の森（丘や山）に囲まれた新開地に、人が入植し定住することを描いている。ひとつの森の巖⁽³³⁾によって語られるこの童話は、人間が自然に依存し、その構成員であることを認識していた時代において、入植者と森との壊れやすい関係を描いていた。この童話で注目すべき点は、たぶんにユートピア的なものであるが、「持続可能性」(sustainability)を示唆していることである。それと同時に、人間以外の世界、大きすぎて単一の視点から知覚できない世界、そしてつねに進化し網の目を生み出す世界のあることが描かれている。端的に言えば、賢治は自身のリアリズムに基づき、ダーウィンの自然選択を表わしていた。

ダーウィンもまた、経験的観察から出発し、人間の知覚を超えた関係の仕組みを描いた。ダーウィンは覚え書きのなかで「鯨を解剖するとき、あるいは、ダニや真菌や滴虫を分類するとき、すべての博物学者が眼前に生じる最も重要な疑問は、生命の法則とは何かということである⁽³⁴⁾」と記した。ファラデー(Michael Faraday, 1791-1867)が電磁場について立証した約7年後に、ダーウィンは相互連続性という概念を付け加えた場の理論の、いわば生物学版を発表していたことになる。それまで観察と分類に終始していた博物学者は、観察や分類と同様に、連続性が重要なことであると想定できなかった。ダーウィンは『種の起源』の最後を「生命はそのあまたの力とともに、最初わずかのものあるいはただ一個のものに、吹きこまれたとするこの見かた、そして、この惑星が確固たる重力法則に従って回転するあいだに、かくも単純な発端からきわめて美しくきわめて驚嘆すべき無限の形態が生じ、いまも生じつつ

あるというこの見かたのなかには、壮大なものがある⁽³⁵⁾」という文言で締めくくっている。連続性こそがダーウィンの理論的基礎となっていた。賢治も人間の知覚を超えた関係に注目し、その関係の連続性に着目していた点で、ダーウィンの考え方に近かったといえる。

3 野性と文明

賢治による『銀河鉄道の夜』（1924年頃に初稿が執筆された）や詩の多くにおける自然描写は、エネルギーの場や分子運動の領域を思い起こさせるものであった。⁽³⁶⁾賢治は物理学・化学・生物学の知識に基づいた土壌調査を行っていたことが示すように、科学的な見方を身に付け、それに基づいて想像を膨らませるという素養をもっていた。賢治は人間の世界さえ、皮肉を込めて土壌調査に例えて描いている。たとえば、詩「政治家」（1927年）は、「あっちもこっちも／ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかりだ／羊歯の葉と雲／世界はそんなに冷たく暗い／けれどもまもなく／さういふやつらは／ひとりで腐って／ひとりで雨に流される／あとはしんとした青い羊歯ばかり／そしてそれが人間の石炭紀であったと／どこかの透明な地質学者が記録するであろう⁽³⁷⁾」という詩である。人間もまた石炭という堆積物に変化し、「どこかの透明な地質学者」によって記録される時がやってくると描いている。この詩の背景には、賢治が農業指導に奔走するなかで生まれた葛藤があると考えられるが、それさえも自然現象に例えている。

賢治の作品はすべて自然を対象にしているといっても過言ではないが、自然を画一的に描いているわけではない。賢治の詩「グランド電柱」（1922年）は、「あめと雲とが地面に垂れ／すすきの赤い穂も洗はれ／野原はさすがしくなつたので／花巻グランド電柱の／百の碇子にあつまる雀／／掠奪のために田にはひり／うるうるうるると飛び／雲と雨とのひかりのなかを／すばやく花巻大三叉路の／百の碇子にもどる雀⁽³⁸⁾」と描いているように、人の手が入っていない自然と、人の手による文明の境目を表現している。この詩は人の手

が入っていない自然の姿から始まっているが、それは多くの人が毎日出合っている空の侘しい広がりである。雨と雲が岩手の野原に垂れ、ススキの穂を洗っている。しかし、第一連の終わりに、電柱の碇子という自然と不調和なものが現われ、自然とは異なる様相に向かっていく。百の碇子は人間文明の活動のひとつを示唆し、人の手が入っていない自然（野性）と人の手が入ったもの（人工物）を隔てる境界を意味している。野性と文明との境界が碇子という形になり、お互いに入り込まないよう食い止める働きをしている。この碇子で表わされた境界こそが、賢治の多くの作品で野性と文明の間の、相互の危機と啓示の場として描かれる。

詩「グランド電柱」は、文明化された最新の試みでさえも、文明を完全に保証するものでないことを示唆する。最新の試みも欠陥があり、つねに野性との関係は残り続けている。スズメは電線上にとまり、人の手が入った田からコメを掠奪する。戸棚にある殺蟻剤、地下室の雪かきシャベル、内科医によって投与される抗生物質などで表現されるように、文明は野性の侵略に備えなければならない。しかし、賢治は野生の侵略のほうに美と価値を認める。環境文学史家のカレン・コリガン・テーラー（Karen Colligan-Taylor）によれば、賢治は人の手が入り洗練された桜の花よりも、タンポポの綿毛のほうを好んだとしている⁽³⁹⁾。これはアメリカの著名な自然保護主義者アルド・レオポルド（Aldo Leopold, 1887-1948）が「町の空き地の雑草はセコイアと同じ意味をもつ」と述べたのと同じである⁽⁴⁰⁾。賢治にとって野性の領域と人の手が入った自然は、お互いに完全に分けられないものであり、分けるべきものではないと考えていたようである。

賢治が書いた多くの詩や童話において、人工的な人間社会と自然との区別や、自然な日本文化と非自然な近代文明という区別はつけられていない。区別がつけられているとすれば、そのままの自然（野性）と人の手が加わった自然（非野性）とである。賢治による野性と非野性という枠組みは、ディーブエコロジーの活動家であり詩人でもあるゲーリー・スナイダー（Gary

よくみるとみんな大きな刀をさしてゐたのです。⁽⁴³⁾

火山によって誕生した後、植物相が現われ、最初の開拓者がやってくる。原野と農耕との出会いである。童話「狼森」は、土地自体によって擬人的に語られる手法がとられ、野性と人間との相互関係の物語として描かれ、時間が可視化され、原野と農耕の境界が弾力性のあるものとして描かれる。

童話「狼森」の読者は、人間の言葉に翻訳された山の声を聴くことになる。崖や山が人間の言語を使うことは、人間と人間以外の世界で意思疎通が不可能であることを示すとともに、その一方で両者の間には深いつながりがあることを示唆する。意思疎通は不可能であるが、深いつながりをもつというのは、賢治による多くの作品の主題となり、童話の深層部分を支えている。つまり、人間が人間以外の世界を認識できるのは、人間も世界の一部だからである。それについて生態学者の今西錦司（1902-1992）は、「宗教家や詩人がわれわれ人間以外のいろいろなもの、たとえば木や石と話をし、その声を聴いたからといって、われわれはちっとも驚かない。ただその声はわれわれのように口がしゃべった声ではなく、その声を聴いたのはわれわれのように音を聴く耳ではなかった」からであるという⁽⁴⁴⁾。言い換えれば、自然の世界の言語は「翻訳」されなければならないのである。

人間の言語ないし知覚の境界を越えたものを、実証主義は形而上学として斥ける。しかし、人間と人間以外の世界の歴史的な相互関係を追ってきた環境史家のウィリアム・クロノン（William Cronon, 1954）によれば、自然の世界を記述し「理解する方法は、われわれ自身の価値観や憶測と絡まり合っているので、この二つは完全に分離することはできない」のである⁽⁴⁵⁾。クロノンの考え方にしたがえば、賢治の童話は、文明にみられる現実主義的な側面をもつとともに、生態学的意識によって生み出される倫理的側面とが密接に絡み合っていることを表現している。また賢治の童話は、いわば人間の「脱中心化」に向け、現実主義的な考察を続けた成果であるともいえる。物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルグ（Werner Karl Heisenberg, 1901-1976）は「自然科学

は単に自然を記述したり説明したりするだけではない。それは自然とわれわれとの相互作用の一部である⁽⁴⁶⁾と述べているが、賢治の作品の多くに通ずるものである。賢治は、自然とは人間としてのわれわれすべてと、われわれでないすべての両方であると考え。それゆえに賢治の作品は自然という言葉だけでは捉えきれない。童話「狼森」では、人間と人間以外、野性と人為、今日の風景と原初の姿、それぞれの間にある緊張と衝突、そして相互作用などが描かれている。

童話「狼森」では、人間の入植による野性の排除・占拠・支配が避けられないものであるとは考えない。百姓は農耕のためにやってくるが、それを語るのは、人間の声ではなく、人間に支配されていない自然の声である⁽⁴⁷⁾。入植者側からは、農耕や林業で使われる道具は武器として理解されているが、森の視点からは侵略手段と映る。入植者が使用する鋤や山刀は、森にとって悲惨な結末を予感させるものであった。しかも森への侵略はそれにとどまることなく、エネルギー源である木炭の製造によって、やがて森（実際には東北地方の広葉樹）の破壊がもたらされた。「人間の側では、農具と名づけることで、実は、その鉄で作られた道具によって、自然を傷つけ、殺害しているという事実を隠蔽している⁽⁴⁸⁾」のであった。

しかし、賢治は単に自然の破壊を警告しているのではない。賢治は童話を通して、自然と文明（言い換えれば、自然を支配しようとする文明の力）の対立を、創造的に克服しようとしている。人間の手が入った全体系と野性の全体系とは相互に依存し合っているので、文明は自然からまったく切り離されたものではない。すなわち、童話「狼森」は人間による自然の悲劇的な支配の物語ではなく、人間が自然のなかに組み込まれていることを認識できなかったため、それによってもたらされた悲劇を描いている。おそらくこれは前述の丘浅次郎『進化論講話』による影響を受けているのであろうと考えられる。『進化論講話』には「自然における人類の位置」と題された章があり、「生存競争」「生物相互の複雑な関係」「生物の起源は一であること」などについて

て記されている。そこでは人間も自然の一部であり、人間と自然との間に複雑な相互関係のあることを説明している⁽⁴⁹⁾。

人間は実際、自然のなかで他に類をみない位置を占めているが、人間は有機体という点では、地球上の他のすべての有機体と同じである。人間は比類なき存在かもしれないが、とくに並外れた存在というわけではない。他の有機体と同じで、人間はまわりの自然界を知覚し解釈することによって生き残っている。しかし、人間の生存を複雑にしているのは、人間と生存条件との間で進化した文化的技術的関係である。人間の自然からの疎外は、自然からの自立としてではなく、生物学上の生存競争における人間の独自の経験として理解されることである⁽⁵⁰⁾。こうした視点に立てば、人間は地球上で特異な存在であることを享受しているものの、それは自然の束縛から自由であるかのように振る舞うことによるのみ可能になることである。人間が自然のなかで特別な位置を享受しているという考えは、いわば言説上で作られたものにかすぎない。人間は言語を人間以外の動物と共有していないものの、生物学的な必要性という点は共有しているからである。

他の有機体と同じように、人間は自分の環境を選択し、そして改変する。人間は環境に反応し、その構造を変形する。しかし、童話「狼森」の百姓は、環境を無視して土地を選び開墾し始めたわけではない。一方、この地域の柏や松は、種子をまき散らすことによって、生育地を選択し、その土地を占拠している。現在では、占拠している森林が、ある程度の規模さえあれば、降雨や大気の状態に影響を及ぼすことが知られている⁽⁵¹⁾。童話「狼森」のなかでは、入植の位置を決めるのは、先頭の百姓が人差し指で示した「選択」という行為である。この行為は人間に限定されるものではなく、すべての生命に共通している認識行為である。「生命体は自分たちの環境を選択する」だけでなく、「自分たちの環境のどのような面が適切であり、そしてどのような環境変動であれば我慢できるか、あるいは無視できるかを決定している⁽⁵²⁾」のである。百姓は土をなめて地味を確かめる。次に森や水が利用できるのか、作物を育て

るための日当たりはどうかなどを確かめる。これは人間による単なる自然環境の選択ではない。有機体は自分の環境を選択するが、時間の経過とともに、次は有機体のほうが生存と絶滅という過程によって選択される側にまわる。

ダーウィンは「自然選択」という言葉を、「人為選択」と区別するためにつくった。人為選択は作物の改良や交雑など、変異と遺伝に関する多くの研究に題材を提供してきた。⁽⁵³⁾この点で進化論は当初から、野性と人為の関係について研究することによって考察を深めてきた。ダーウィンは「どんな軽微な変異も有用であれば保存されていくというこの原理を、それと人間の選択との関係をあらわすために、私は<自然選択>の語でよぶことにした。人間が選択によって確実に大きな結果を生ぜしめうること、また<自然>の手がかれにあたえた、軽微ではあるが有用な変異の集積により、生物を自分の用途に適応させていかれることについては、すでにのべた。しかし自然選択は、のちに明らかになるように、いつまでもはたらせるように用意されている力であり、しかも人間の弱小な努力とはまったく比較にならない大きさのもので、それは<自然>の仕事が<人工>の作品にたいするのと同様である⁽⁵⁴⁾」と語る。

しかしダーウィンは、自然の法則のもとで必然的に展開する文明化を、不自然なものとして表現した。農業と工業は野性的特徴を無くしてしまうのに役立ったが、自然の特性を無くすことはできなかった。たとえば、スナイダーは、ニューヨークや東京は自然といえるかもしれないが、野性といえないとし、「どちらの都市も自然から逸脱していないが、それが庇う人やものに関してだけの生息地で、本当に奇妙なほど他の生き物に対しては不寛容なのだ⁽⁵⁵⁾」と記している。自然ではあるが、野生ではない。一見したところわずかな意味の違いが、今日の環境危機の問題につながっている。人為選択という意図的な行為とともに人間の占有の結果、生命体を荒廃に追いやっている。すなわち、衰退する、あるいは衰退し続けているのは、自然選択という過程ではなく、野性に対する文明による物質的文化的な働きかけが原因なのである。

たとえ人為選択が生物圏を支配したとしても、それは野性の死を意味するわけではなく、野性が「厄介者」として表現されるような新しい形態の自然が現われるにすぎない。野性は過去から絶え間なく生き続けているので、賢治によって著わされた童話「狼森」の百姓のように、野性に対する見方が変わったにすぎない。具体的には、過去にはドイツの森で狼が人間を襲っていたが、現在、その代わりに東京の街角でカラスが残飯をあさるという状況になり、野性はなおも生き続けている⁽⁵⁶⁾。むしろ野性の状態そのものは拡散する傾向にあり、国立公園のような限定的な野性の象徴を越えて広がっている。これはスナイダーによれば、見方によっては、野性はどこにでもあるという状態にある。そうだとすれば、自然選択や、それに依拠する自然が終わってしまったわけではなく、野性の仕組みが多様化したということになる。人類は旧石器時代以来、野性ととも生きてきたが、文明が進展するなかで、野性との関係が変化してきた。賢治によれば、この変化した状態もまた、自然の一部ということになる。このように考えれば、今日の生物学的多様性に対する危機的な状況は、自然選択と人間文化とが影響し合ってきた結果なのであり、自然選択が消滅する前兆とは必ずしもいえないのである。

4 食物連鎖と農耕

童話「狼森」では、百姓は農耕や森を切り拓くために、鉄の道具を携えてきただけでなく、古い掟ももち込んだ。それは次のように描かれている。

そこで四人の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃へて叫びました。

「こゝへ畑起してもいいかあ。」／「いゝぞお。」森が一斉にこたへました。みんなは又叫びました。「こゝに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた声をそろへてたづねました。／「こゝで火たいでもいいかあ。」

「い、ぞお。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた叫びました。／「すこし木貰つてもい、かあ。」

「ようし。」森は一斉にこたへました。

男たちはよろこんで手をたゝき、さつきから顔色を変へて、しんとして居た女やこどもらは、にはかにはしやぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩をしたり、女たちはその子をばかばか撲つたりしました。⁽⁵⁷⁾

人間はまず山や森に「お願いする」ことが必要であるという倫理性が描かれる。百姓が森に尋ねているのは、開墾者である人間と森のつながりを暗示しているとともに、森にとって違和感のある出来事であることも暗に示している。そもそも農耕は、人間が生態系の食物連鎖から自らを解放し、その特権を与えられた生物であることから始まったというわけではない。人間は一連の食物連鎖から逃れがたい存在であり、食物連鎖の一部であり続けている。したがって農耕は森にとって不吉な出来事なのであった。⁽⁵⁸⁾

食物連鎖は、1927年にチャールズ・エルトン (Charles Elton, 1900-1991) によって生み出された概念であり、連鎖の最下位 (光合成によって食物を生み出す植物) が最も重要な鎖であることを明らかにした。⁽⁵⁹⁾ エルトンによれば、人間は高い序列にいる存在というよりも、不安定な存在なのである。最も単純な有機体が全体を安定させ、それを維持するために他の有機体よりも重要なものであった。エルトンはどのような生物社会の食物連鎖であっても、それは頂点も底もない「網」であると説明した。生産・消費・分解・還元などの役割を果たす有機体は、自然の機構のなかで、複雑な相互依存のネットワークを形成している。エルトンによる食物網のモデルは、いわゆる階層秩序という考え方から説明できるものではない。賢治はあたかもこのエルトンの考察をたどったかのようにであった。自然のなかの優位性を相対的なものとする発想は、おそらく前述の丘浅次郎『進化論講話』の影響のもとに、賢治の感性が導き出したものであろう。

賢治の童話「狼森」では、百姓が土地を利用する許可を得るという礼儀を

守ることによって、原初の「平等性」を保ちえたことを示唆している。百姓の儀礼的な言葉遣いには、自然との間で生存の契約を結ぶという意味が反映されている。それと同時に、自然の一部を殺傷するかもしれないが、全滅させることはないという意味が含まれている。もちろん、百姓が当初の契約上の倫理性を保持し続けるのであれば、危機的な状況が訪れることはない。なるほど開墾者が土地を切り拓き、家を建て始めたとき、その謙虚さと協働によって、森との関係は良好に維持できた。しかし、森の視点に立てば、百姓の勤勉さには何か不吉なものを感じられるのであった。

童話「狼森」では、翌年の秋には、百姓は森からの保護や恩恵をほとんど必要としなくなる。小屋を三つ建て、蕎麦と稗の最初の実りを収穫し、もはや木の実などの森が与えてくれるものをめぐって、森の動物と直接争うことも無くなる。小さな共同体が生存のための経済（採集という行動）から離れ、蓄積の経済（農耕という行動）へと向かう時に、最初の危機が訪れる。冬のある「土の堅く凍つた朝」に、百姓の子ども9人のうち4人がいなくなる。百姓は、森の視点からみれば「気違ひのやうになつて」とみえる必死の反応を示す。子どもがいなくなったことに対するパニックで「気違ひのやうに」なるのと、前年の秋に「きちがひのやうに」働くのとは類比的に描かれ、生存と開発とが不可分に結びついていることを表わしている。子供の生命や次の収穫が懸かっているだけでなく、集落そのものの存続が懸かっている。百姓は森に助けを求め、子供の所在を森に尋ねる。森は知らないといい、こちらに来て探してみると答える。

そこで次の展開は、

そこでみんなは色々の農具をもつて、まづ一番ちかい^{オノノモリ}狼森に行きました。森へ入りますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉の匂とが、すつとみんなを襲ひました。みんなはどんどん踏みこんで行きました。すると森の奥の方で何かパチパチ音がしました。急いでそつちへ行つて見ますと、すきとほつたばら色の火がどんどん燃えてゐて、狼が九疋、くるくるく

るくる、火のまはりを踊つてかけ歩いてゐるのでした。だんだん近くへ行つて見ると居なくなつた子供は四人共、その火に向いて焼いた栗や初茸などをたべてゐました。(中略) みんなはそこで、声をそろへて叫びました。「狼どの狼どの、童しやど返して呉ろ。」狼はみんなびつくりして、一ぺんに歌をやめてくちをまげて、みんなの方をふり向きました。すると火が消えて、そこらにははかに青くしいんとなつてしまつたので火のそばのこどもらはわあと泣き出しました。狼は、どうしたらいいか困つたといふやうにしばらくきよろきよろしてゐましたが、たうとうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました。そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようとなりました。すると森の奥の方で狼どもが、「悪く思はないで呉ろ。栗だのきのこのだの、うんとご馳走したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰つてから栗餅をこしらへてお礼に狼森へ置いて来ました。⁽⁶⁰⁾

この場面では狼に象徴的な意味をもたせて描かれている。日本における野性の狼は1905(明治38)年に死滅し、それは賢治が童話「狼森」を発表する約20年前のことであつた。しかし、狼(岩手の方言ではオイノ)は、野性の神秘と危険の象徴として、その後も残り続け、しばしば民話や童話に登場する(これは欧米でも同様)。人類学のジョン・ナイト(John Knight)によれば、西欧では狼は純粋な悪を表現しているのに対し、日本の狼は恐ろしく危険な肉食獣であると同時に、強力な保護者であり「神のお使い」であるという両義的なイメージをもっている。⁽⁶¹⁾

明治期以前の日本では、食用に家畜を育てるという伝統がほとんどなかつたので、狼は野生動物と同様に脅威を与える動物というよりも、野生動物を抑制している動物と考えられていた。基本的に穀物を主食とし、魚や野菜を副食とする百姓にとって、暮らしに対する直接的な脅威は、鹿・猪・猿など作物を荒らす動物であつたからである。民俗学の千葉徳爾(1916-2001)によれば、17世紀後半まで益獣としての狼の地位は、肉食獣としての技術に基づ

いていたものである。⁽⁶²⁾日本の狼は民話や宗教上の保護者として表わされる。そして「救いの神」としての地位や「山の神」と結びつけられ、動物の食物連鎖で一定の位置付けが与えられていた。狼が絶滅した今日でも、農村の狼を祭る神社では、農地を害獣から保護するものとされている場合がある。

賢治の童話「狼森」では狼のもつ両義性を生かし、人間（人為）と自然（野性）との境界を表現する。狼は森と田畑の境界を警備もすれば侵犯もする。優しかろうと悪意があろうと、狩る者と狩られる者との間は分離不能である。しかし、童話のなかで子供を連れ去るという狼がもつ危険性、あるいは狼の悪ふざけは、人間と野性との間の食物交換を描こうとしたものである。百姓は森の危険から逃れるために、森から多くのものを奪ってきたが、いま森が百姓から何を奪うのかと、百姓のほうが懸念している。この場面は野性の依存から逃れられない文明の不安定な状態を描いたものであるともいえる。

人間は野性の恩恵に依存し生きることによって、野性の一部であり続けながら、もはや野性に属していないと思っている。民俗学の野本寛一（1937-）によれば、狼は「自然の世界の変則さ」を警告することで、人間を守ってきたという伝説から、狼は「森の番犬」⁽⁶³⁾であった。実際、狼の曖昧ともいえる位置付けは、生態系では十分に表現できず、より多面的な役割があることを示唆している。賢治の童話はこの多面性を明確に表現している。童話では狼は子供の世話をし、きのこや栗をご馳走していたが、この場面は狼が人間の脅威となってから後のことである。つまり、人間の評価にかかわらず、狼は人間と共存し続けていたことを示している。しかも、百姓が森のなかで子供といっしょにいる狼を発見したとき、悪く思わないでくれという狼の嘆願は、森（狼森）が発した「公正に扱ってほしい」という要求と解釈できる。⁽⁶⁴⁾

賢治の作品では、文明化した人間がみるはずのないものをみるということが繰り返し描かれる。多くの日本の伝説では、山と村を行き交う狐が登場し、人間の活動範囲を超えた山奥と結び付けられた狼が現われる。⁽⁶⁵⁾狼を目撃するのは、文明と野性との境界を越えたことを意味する。したがって、百姓によっ

て狼がその存在を知られると、狼は逃げ去り、人間との距離を置くようになる。しかし、これはそれまでの空間的な秩序と領域が崩れることを意味するものではない。むしろ秩序や領域の再確立を意味するものとなり、新たな関係を構築し、お互いの行動指針となるような関係を築くことを意味する。きのこ栗が森の施しを表わすとすれば、栗餅は集落の家庭生活、住空間、燃料、建築資材など、野性がそれまで提供してきたものに対する返礼であり、供物を意味する。当初は狼に進物として贈られた供物は、聖なる儀式の始まりを告げるものである。百姓から野性へ渡されたものは、森に対する御礼であり、百姓が忘却できない相互依存関係の象徴でもある。

したがって、童話「狼森」で描かれた危機的な状況は、もちろん単に4人の子供の死が避けられたことで、回避できただけということの意味しない。童話は野性と人間との間のやり取りを語ると同時に、その関係の崩壊が迫りつつあることを暗示していた。日本では1993(平成5)年に、森の生態系に狼を再導入しようという運動が起こった⁽⁶⁶⁾。狼は田畑の守護者というだけでなく、森そのものの救い主であるという考えに基づいた運動であった。前述のジョン・ナイトによれば、日本の農村には、急増している野生動物による害を「狼を絶滅に追い込んだ社会へのたたり」⁽⁶⁷⁾とみなす場合もある。野生動物による被害が増大するなかで、それに対処する手段として、さらに森の生態学的バランスを回復する手段として考えられた⁽⁶⁸⁾。しかし、狼の再導入運動の意思に反し、賢治が描いてみせた百姓が維持しようとした生態学的バランスの崩壊は、時代を追うごとに加速度を増している。それは現在、日本全体にわたって野生動物の生息環境が侵食されることにつながり、生息環境の侵食はさらに激化している。まさに「獣害」の頻発が、それを物語っている。

5 生態系と科学

賢治は当初から生態学を学んで、それを作品に忠実に投影したわけではない。賢治は農学を学び、当時の農業技術について、かなり楽観的ともいえる

考えをもっていた。地元の農民に近代的な施肥技術を広めるなど、当時の高等農業教育を受けた進歩的な知識人に共通する近代文明への傾倒がみられた⁽⁶⁹⁾。しかし、その一方で健全な文明であれば、野性と共存できるものであり、あるいは共存すべきであるという考えももっていた。この賢治の着想の背景にあったのは、森林のあり方である。日本近世史家のコンラッド・タットマン (Conrad Totman) によれば、1700 年頃までに本州の森林の約半分で、材木伐採の手が入っていた⁽⁷⁰⁾。とくに東北地方の森林は、16 世紀半ばから始まる広範な伐採の影響を受けていた。そして 20 世紀初頭には、日本全体においてまだ広範囲に手つかずの大規模な森林が広がっていたのは北海道だけという状態になった。森林はこのような状態であったので、賢治が童話や詩のなかで、サルやクマ、シカが棲む広葉樹の森を描けば、それは過去の神秘的な世界を想起させるものであった。もっとも、森林破壊の主要な要因は、木材利用のための伐採というよりも、農地開拓という土地利用の転換が推進されたことであった。

賢治は童話のなかで、森は百姓に建築資材と飼葉、緑肥のための藪や草、そして栗やきのこ、鳥獣の肉、魚などの食物を供給した。これらのことが森に打撃を与えたというわけではなく、燃料（エネルギー源）として薪を刈ることが、森に対してより直接的な打撃を与えた。薪は暖房や調理に利用され、鉄の製造に用いられた。さらに木炭をつくるため、柏や栗、その他の広葉樹が用いられた。実際に地元の岩手県では、炭焼きが産業や農家収入面において重要な位置を占めていた。わが国では戦後の燃料転換が起こるまで、家庭の暖房や調理において木炭が用いられていたが、岩手県はその一大供給地であった。岩手県は広葉樹が豊富にあり、木炭生産の一大中心地であった⁽⁷¹⁾。

岩手県における森の変化は、動植物の生態系に大きな影響を及ぼした。ニホンザル研究の三戸幸久 (1946) は、19 世紀半ばから 1925 (大正 14) 年にかけて岩手県の木炭生産の拡大と、野性のサルの劇的な減少には直接的な関係があるとしている⁽⁷²⁾。野性と人間が相互作用を及ぼす空間である地域 (賢治

の多くの作品で重要な場)は動植物の生息地であり、その破壊は動植物に大きな打撃を与えた。たとえば、サルばかりでなくシカもそうであった。霊長類学の河合雅雄(1924-2021、以下は河合)によれば、明治末期から大正期にかけて岩手県における野生のシカの急減は、1919(大正8)年に県が鹿猟を禁止しなければならぬほどの減り方であった。⁽⁷³⁾河合は、賢治の作品では、動物学的に注目される動物はほとんど対象とならず、もっぱら農村地域に一般的にみられるキツネ・ネズミ・タヌキ・シカ・ウサギ・イタチなどが登場すると指摘する。そして、これらの動物が現われる地域は「里山」(一般的に集落周辺が樹木でおおわれ、地元の農業に必要なものを供給できる地域)とよばれるが、賢治はそれに関心を向けている。

岩手県全体を里・里山・奥山と区分すれば、人間の居住と自然が距離的に最も近い里山の重要性は大きい。里山では人間が歴史的に野性を利用し、守り、そして守られてきた。河合は賢治の童話で描かれる「森」は、千メートル以下の山が近隣にある里山をさしていると指摘する。里山という言葉は戦後に作られた言葉であることから、賢治は早くから里山の重要性に気付いていたといえる。里山という境界地域で、百姓は野性とつながり、生活を営んできた。⁽⁷⁴⁾しかし、上記のように戦前・戦中の木炭生産が広葉樹林の侵食を助長し、さらに戦後の石油・ガス・化学肥料の利用増加によって、森林回復に対する意識は薄れた。戦後、森林再生の取り組みがなかったわけでないが、その多くは広葉樹を針葉樹(住宅や建築用材となる)へと置き換える取組みであった。今日、国土面積の25%以上が針葉樹による人為的な植林地で占められ、その結果、森林面積は増加しているにもかかわらず、日本固有あるいは伝統的な野生動物の生息地は減少するという、一見したところ逆説的な状況が生まれている。そのために里山における集落と森との相互依存関係は稀薄となり、今では「村は高く暗い針葉樹林に囲まれ、くっきりとした境界をなすに至っている」⁽⁷⁵⁾という状況になっている。

現在、里山の事実上の消滅は、農村部の高齢化・過疎化とともに、獣害に

よる被害が深刻化する要因となっている。もはや境界あるいは中間地帯が失われてしまったといえる。シカ・クマ・イノシシ・サルなどが頻繁に集落でみられるようになり、農産物を食い荒らしている。野生動物による農作物の被害が増えるにつれ、賢治の童話に描かれた緊迫感は、いま異なる意味をもち始めている。すなわち、賢治が描いた野性と農耕との戦いは、今日でも森の周辺の集落で続いているが、それは百姓が里山の文化を確立しようとしているからでなく、その消滅の危機と取り組まざるをえなくなっているからである。

ジョン・ナイトは「森に棲むと思われる野生動物が頻繁に村に現われ始めたなら、それは「悪いこと」が起こっているのを示している⁽⁷⁶⁾」と記している。賢治によれば、悪いこととは、野性が人間を支配することでも、その逆でもなく、野生と人間との交渉が絶たれることである。共に繁栄することの失敗であり、共生の失敗である。タットマンによれば、日本における人間と森林との関係史は、二つの局面に区分できる。「最初の局面は三万年におよぶ農耕以前の時期で、ホモ・サピエンス・サピエンス（新人）が小さな木や動物の骨、石器を使って森に働きかけていた時代である。この段階ではヒトが森の基本的な特徴を変えるまでにはいたらなかった。二番目の局面は最初の局面よりもはるかに短く、まだ二五〇〇年しかたっていない。この時期になると人口が増え、ますます複雑で高度な技術が使われるようになった。そのために、平坦地だけでなく、アクセスできる山間地においても、広い面積の林地がその特徴を根本的に変えることになった。この第二の局面での森林消失は、農地の開拓ともなって徐々に進展し、目立たないかたちで始まった⁽⁷⁷⁾」とされる。賢治の童話「狼森」は、この二つの局面の移行期の姿を描いているかのようにみえる。

賢治は理想の姿として、野性とともに生きる創造的な文明を取り上げるが、それは野生との交渉を通して描かれる。たとえば、童話「鹿踊りのはじまり⁽⁷⁸⁾」(1924年)である。この童話は、北上川の東から移ってきて、小さな畑を開き、

粟や稗をつくっていた嘉十が、山の中の温泉で傷ついた足を治療するために、耕作地から野原を越えてやってきたところから始まる。食べ残し（栃の団子）をわざとシカのために残し、再び旅を続けるが、休んだ場所に手拭いを落としてきたことに気付く。それを取りに戻ると、六正の鹿が手拭いのまわりをぐるぐる回っているのを目にする。嘉十は隠れてみていると、奇妙な感覚におそわれ、シカの会話を理解できるようになる。嘉十はシカと本質的な違いを感じるとともに、類縁関係も感じる。「嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のやうな気がして、いまにもとび出さうとしましたが、じぶんの大きな手がすぐ眼にはいりましたので、やつぱりだめだとおもひながらまた息をこらしました⁽⁷⁹⁾」という状態になる。嘉十はシカとのつながりを認識した瞬間に、自分とシカが一体であるというのは幻想であると気付く。

嘉十は一時的にシカ同士の会話を理解できたとはいえ、シカとの真のつながりは、言語を通して可能になるわけではなく、食べ物を通して可能となる。団子が人間の世界からシカの世界へ（耕作から野性へ）渡されたとき、怖れの感情が人間とシカで共有される。人間の手から野生動物へと食べ物が渡されるのは、身体的なものであると同時に、精神的なものである。さらに食べ物を分け合うことで、同じものを必要としているという、野性動物と人間との連続性を意味している。賢治は野性と人間の営みのつながりを描こうとしているのである。

賢治は実際に、このつながりを追求するために、農民になりたい（農業の実践）という欲求の実現に向かう⁽⁸⁰⁾。そのひとつの試みが「羅須地人協会」の設立であった。賢治は実際の農業に関わることが、野性（自然）とのつながりを確かめ、自分の構想を実現することであると考えた。賢治は教職を辞し、家族が所有していた近隣の家に引っ越し、その土地を耕作し始めた。この行動は地元の農民にとって胡散臭いものに映り、単なる酔狂だとみられた⁽⁸¹⁾。しかし賢治のほうは、それまでの教室や教科書から学ぶ農業ではなく、自然に直に触れ、農民と触れ合う農業をめざした。賢治は1925（大正14）年に友

人宛の書簡において「来春はわたくしも教師をやめて本当の百姓になって働らきます いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の穂やドロの木の閃きや何かを予期します わたくしも盛岡の頃とはずるぶん変ってゐます あのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考へてゐましたのにいまは苗代や草の生えた堰のうすら濁ったあたたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水口を繕ったりすることをねがひます⁽⁸²⁾」と語る。賢治は農業実践を通して、生物世界に直接接触れる。この体験が少なからずその後の作品に反映される。その一方で、地元の農民に受け入れられていないという葛藤もまた、作品を生み出すうえで、大きな弾みとなった。

賢治は学生の時から土壌学を学んでいた⁽⁸³⁾ので、人間と生物の相互関係に関する知識はあった。羅須地人協会での講義である「農民芸術の興隆」では、反科学的・反工業的な面がみられるものの、基本的な姿勢は、科学や産業との対立を示唆するものではない。実際の農業活動は、土地と人間との持続可能な関係が根本になっていたからである。賢治が実際に行おうとしたことは、科学的な農業の実践であった。たとえば、羅須地人協会時代において、賢治が最も力を注ぎ、多くの時間を割いたのは、地元農民のための無料肥料相談⁽⁸⁴⁾であった。賢治は田畑や栽培方法に関する質問票を配り、土壌を採取して分析し、農民のために詳細な栽培計画を立てた。農民に対して高価な化学肥料よりも、安価な堆肥や厩肥を勧めた⁽⁸⁵⁾。賢治は科学と農業の結合をめざす一方で、経営を考慮に入れた有機物の利用も重視した。言い換えれば、科学と生態系との調和をめざす農業を勧めていた。1926（昭和元）年に羅須地人協会の講義では、「農業ニ必須ナ化学ノ基礎」「土壌学要綱」「植物生理要綱」「肥料学要綱」などが行なわれ、教材として「化学ノ骨組ミ」「植物ノ生育ニ直接必要ナ因子」「土壌学須要術後表」などが使用された⁽⁸⁶⁾。この講義や教材から、農業生産性の向上をめざして、化学・土壌学・植物生理学などの科学の活用を考えていたことがわかる。

6 共生空間の形成

生態系と科学という視点からみれば、童話「狼森」における入植地は豊饒な地域であると同時に、危険な地域でもあった。集落は子ども（4人）の誘拐という出来事のあった翌年に、子どもの数は11人に増え、馬2匹を獲得している。家畜の存在によって、より効率的な耕耘と施肥ができるようになる。「畠には、草や腐つた木の葉が、馬の肥と一諸^{ママ}に入りましたので、粟や稗はまつさきに延びました」という状態になり、それ以後、徐々に生産性は上がっていく。しかし、さまざまな問題も発生する。

百姓が、ある朝早く目覚めると、山刀^{なた}も鋏も、その他の道具も、すべてなくなっていることに気付く。再び百姓の生存は危機にさらされる。農具類を探した結果、みつかったものの、その場所には「黄金色の目をした、顔のまつかな山男」が座っていた。ここで賢治は単に動物世界ではなく、森に代表される野性そのものとの交渉を示唆している。百姓は、

「山男、これからいたづら止めて呉ろよ。くれぐれ頼むぞ、これからいたづら止めて呉ろよ。」山男は、大へん恐縮したやうに、頭をかいて立つて居りました。みんなはてんでに、自分の農具を取つて、森を出て行かうとしました。すると森の中で、さつきの山男が、「おらさも粟餅持つて来て呉ろよ。」と叫んでくると向ふを向いて、手で頭をかくして、森のものと奥の方へ走つて行きました。みんなはあつはあつはと笑つて、うちへ帰りました。そして又粟餅をこしらへて、狼森と笊森⁽⁸⁷⁾に持つて行つて置いて来ました⁽⁸⁸⁾。

ここで登場する森は、人間世界と結び付いた野性であったが、その結びつき方は新たな局面に入る。すなわち、百姓は森蔭に住み、森で薪やキノコを採り、それらの恩恵を受けていることに対し、山男として描かれた森の精霊に捧げものを供える。もはや集落は森を抜きに存続することはできない。文明によって野性から切り離されたのではなく、むしろ結びつきは強くなったというこ

とである。この意味で人間の集落と野性は「相互浸透⁽⁸⁹⁾」の結果によって進化している。

賢治の描く創作の世界は、文明と野性の対立を描いたものではなく、文明と野性との相互浸透によって、相互のバランスが保たれ、調和がもたらされるといふものであった。言い換えれば、文明と野性の共生をつくり出そうとするものであった。もしそうであるとすれば、この場合の共生は、進化論的な変化とされる概念と果たして両立できるのかが問題である。文明が野性を侵略することが「進歩」であり、人間が下等な生命体に対し優越的な地位にあるのは必然であるという考えは、近代社会において支配的となった。進化という概念の核心部分には変化があるので、進化は変わりやすさや不安定性を必然的にともなうものである。それに対し、賢治は人間を含む生物相互の複雑な関係を描くことによって、ひとつの新しい進化の形態を示した。この意味で共生と進化は結びついている⁽⁹⁰⁾。そして賢治による進化の先にあるのは、調和であり安定である。童話「狼森」では、「次の年の夏になりました。平らな処はもうみんな畑です。うちには木小屋がついたり、大きな納屋が出来たりしました。それから馬も三疋になりました。その秋のとりいれのみんなの喜びは、大へんなものでした⁽⁹¹⁾」とされ、野生との相互浸透によって、地域において百姓の存在が確立されていることが描かれている。

童話「狼森」の最後には、粟がすべて納屋から消えるという危機の到来が描かれている。犯人は盗森の精で、黒い人間の姿をして現われ、けんか腰で罪を否定する。しかし結局、静かで思慮深い岩手山（一帯の土地をつくった火山）の音が介入している。名称が示す通り盗森は害そのものの体现であり、盗森は収穫物をすべて持ち去ることによって、人間に害を及ぼす。害という名称を動物や昆虫に付与する（たとえば、獣害や害虫など）ことは、人間という生物と共存できないことを意味している。ジョン・ナイトは「害という言葉が作物を荒らす野生動物に用いられると、人間と動物の同等性ないし平衡の出発点を意味する⁽⁹²⁾」と指摘する。野性の害獣や害虫は殺さなければなら

ないか、あるいは寄せ付けないようにしなければならない。それは見慣れないよそ者というわけではなく、「人間と同じ食物レベルに立った」存在という意味になる。ある動物は同じ場所に住み、似たような食べ物を求めるときのみ、人間にとって害となる。ジョン・ナイトは「動物は物質的・生態学的条件において、人間と連続しているからこそ、人間の暮らしを脅かす」と語る。また人類学のブライアン・モーリス (Brian Morris, 1936-) によれば、ぎりぎりの生活を送っている百姓は、作物を荒らす野生動物と「本質的に同じであり、競合する」という。百姓と野生の害獣は競合しているからこそ、まさに対等であると考えられるのである。⁽⁹³⁾

童話「狼森」は、あたかも神話のような解決策をとって幕を閉じる。岩手山は百姓に粟は返させると保障し、「だから悪く思はんで置け。一体盗森は、じぶんで粟餅をこさへて見たくてたまらなかつたのだ。それで粟も盗んで来たのだ。」と説明する。拡大しつつある農耕と、野性の前例のない破壊を目の当たりにして、伝説的な安定を取り戻したかのように終わっている。「さてそれから森もすつかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと粟餅を貰ひました。しかしその粟餅も、時節がら、ずるぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな巨きな巖がおしまひに云つてゐました」で終わる。⁽⁹⁴⁾

この結末が示しているように、童話「狼森」はユートピア的な特徴をもっている。言い換えれば、賢治はユートピア的な特徴をもたせるために、詳しい描写を必要とする小説という形態でなく、わかりやすい童話を選んだ。しかし、ユートピア的とはいえ、童話「狼森」は重要な示唆を与えている。すなわち、童話では「自然に帰る」ことでもなく、「野性に逃げ込む」ことでもなく、すべての物質的・精神的な複合体（ないし相互依存関係）を維持する重要性を訴えている。物語の最後は人間の集落が確立し、野性は元に戻すことができない状態になっているものの、人間と野性の関係について、賢治の生態学的な構想が明らかにされる。それは人間と野性とは相互依存関係を深

めることによって進化するものであり、相互の葛藤や依存に関する認識（物質的にも精神的にも）によって進展していくということであった。

この賢治の構想は、今日のエコ・イデオロギーとは大きく異なっている。たとえば、「地球最優先」(Earth First!)の創設者デイブ・フォアマン (Dave Foreman, 1946-2022)は、環境問題の根源を農業の導入にまで遡っている⁽⁹⁶⁾。フォアマンは旧石器時代の生活を楽しめるような現実逃避的な環境の可能性を訴えているので、賢治の現実的な論理とは対照的である。フォアマンの考えを批判するクロノンは、「人間が地球上で自然に生きることを望みうる唯一の方法は、狩猟・採集者のあとについて原野に戻り、文明がわれわれに与えてきたすべてのものを放棄することではない⁽⁹⁷⁾」と記している。クロノン自身は、家の「裏庭の原野」から始めるような地味な環境保護主義を奨励している⁽⁹⁸⁾。賢治による里山に関する架空の描写と類似しているが、クロノンは「中景」とよぶ人間と野性が占める共通の領域を強調する⁽⁹⁹⁾。クロノンは「中景とはわれわれが実際に住んでいるところであり、われわれすべてが我が家としている場所である」とする。賢治の里山とクロノンの中景という視点に立てば、人間と野性を結び付ける葛藤と依存を認識できる。この葛藤と依存を認めることは、それぞれの違いと結びつきを認識することでもあり、それによって人間と野性との共生空間⁽¹⁰⁰⁾というべきものが形成されることになる。

7 結びにかえて

賢治の作品では、自然と人間の間の環境問題が多く取り上げられている。そしてその作品のほとんどは、詩ないし童話である。このために賢治の自然環境に関する問題意識が、思想史上、どのような位置付けになるのかは、これまでほとんど問題にされてこなかった。あえて賢治の問題意識を思想史の俎上に載せるとすれば、生態学的な思想や運動の流れということになる。なかでも、賢治は人間の内面まで深く入り込んで、作品を展開しているので、もし類似の思想を探すとすれば、ディープエコロジーの思想になる（両者は

アカデミックな討論の場で検討されることは少なかったという共通点をもつ⁽¹⁰¹⁾。最後に、ディープエコロジー思想と賢治の作品の比較を通して、賢治の特徴とその限界を考えていくことにする。

ディープエコロジーの思想は1973年にノルウェーの哲学者アルネ・ネスによって提唱され、1980年代頃からその輪郭が現われた（もちろん、賢治の作品の成立が先行しているので、作品は先駆的な側面をもっているとともに、その時代的・地域的背景は大きく異なる点を考慮しなければならない）。ディープエコロジーの思想は、近代社会や近代文明を批判し、ホーリスティックで調和的な精神世界を対置するロマン主義あるいはユートピア思想の一分派であると位置付けられている⁽¹⁰²⁾。そうであるとすれば、ディープエコロジーは、ロマン主義的な思想がもっていた限界をもっている。その限界とは、内面性・精神性・全体性・宗教性を強調するあまり、現実世界からの逃避を正当化してしまう可能性である。さらにディープエコロジーの直接の出自である保存派（preservationist）の自然保護理論は、自然を開発し管理しなければならない人間中心主義を仮想敵として成立している理論である。これは批判に徹する場合に役立つにしても、理論自体が現実的な対策をもち合わせないという問題点をもっている。賢治の場合も、その作品のほとんどは童話や詩であり、現実世界を取り上げる小説と異なり、一見すると現実世界からの逃避とみられがちである。しかし、前述のように賢治の作品は、地元の農村生活や農業実践を通じて生まれたものが多く、現実世界からの逃避では決してなかった。もちろん、農業を通じて人間中心主義に陥ることもなく、ましてそれを仮想敵とすることもなかった。

次にディープエコロジーの思想は、基本的に欧米の中産階層の知的エリートを中心に形成された。この点についてはネスにも自覚があり、ディープエコロジーに対し、シャローエコロジー（shallow ecology、浅いエコロジー）と語っている。シャローエコロジーとは「環境汚染と資源枯渇に対する取り組みであり、主たる目標は「発展」をとげた国々に住む人々の健康と物質的

豊かさの向上・維持におかれている」⁽¹⁰³⁾であり、ディープエコロジーとはまったく異なるという。しかし、もしそうであったとしても、豊かな社会で成立したディープエコロジーの思想が、途上国の人びと、あるいは否応なくディープエコロジカルな生活を余儀なくされている途上国の人びとにとって、思想的に影響力のあるものになるとは考えられない。さらにディープエコロジーの思想は、人間の「欲望」を過小評価しているという面をもっている。現在の先進国の生活様式から考えて、エコロジカルな自己を実現しようとすれば、おそらく都市部での良い暮らしと快適な生活環境を放棄しなければならない。日々の欲望を捨て去ることの難しい平均的な人間にとって、ディープエコロジーが求めることを実行するのは難しいといわざるをえない。平均的な人間が逃れることのできない内面の欲望を熟慮し、自らの哲学と倫理学に組み入れることができなければ、ディープエコロジーは生活者の行動規範としては根付かないものである。

一方、賢治の作品であるが、ディープエコロジーの思想の成立背景と、時代的・地域的な背景が異なっているとはいえ、多くの類似点をもっている。賢治の出自は、周知のように地域の中上流階層であり、賢治自身は高等教育を受けた知的エリートであった。上記のように、途上国ではディープエコロジーは思想的に影響力のあるものではないのと同じように、賢治の考え方や行動は、地元の農民のなかでは、あまり受け入れられなかった。地元の農民への助言なども、どれほど受け入れられていたのかは不明である。賢治の作品のほとんどは、生前に世に出ることがなかったために、この点も、賢治の考え方を広めるという点ではマイナスになった。また人間の内面的な欲望という点では、賢治自身が禁欲的で求道的な生き方をしているため、平均的な人間の欲望は、どちらかというとな楽観的にとらえる傾向にあった。

さらにディープエコロジーの思想と同様、賢治の作品も、緑の多い先進諸国のローカルナレッジを脱するためには、世界の多様性を射程に入れる必要がある。賢治の生態学的な構想の前提は、限られた里山の世界であり、里山

から生まれたローカルナレッジであった。⁽¹⁰⁴⁾ 現在、グローバル化の影響もあり、環境問題に関しては地球規模のものとなっているので、ディープエコロジーの思想も賢治の構想も、ローカルナレッジを脱することができなければ、その限界は自ずとみえてくる。おそらく賢治の構想をあえて広げていくと、ユートピア的な色彩をますます強めていく可能性をもたざるをえないであろう。

このようにディープエコロジーの思想も賢治の構想も、多くの問題点ないし限界をもっている。しかし、両者ともに現在、環境問題や社会問題を解決する糸口になる可能性や、あるいは解決へ重要な示唆を与えていることは確かである。日々の生活様式が直接的に環境破壊に結びついている今日、人間の内面の価値判断や意思のもち方が、地球環境のあり方に大きな影響を与える。この意味で内面の変革を重視するディープエコロジーも賢治の構想も、その重要性を高めているといえよう。ディープエコロジーの主唱者アルネ・ネスは、ディープエコロジーを市民活動や政治活動までも含んだ英知の学（哲学）としている。賢治の作品は具体的なエコロジーの実践活動を示唆するものではないが、作品を通して内面への思索を深め、それを有機的に個々人のなかで結合させることによって、英知の学（哲学）としての可能性を開くものであるといえる。

注

- (1) たとえば、代表的な例が武者小路の「新しき村」である。これは賢治による「羅須地人協会」の実践の8年前であった。前田速夫『「新しき村」の百年＜愚者の園＞の真実』新潮新書、2017年、148～52ページ。
- (2) 近代日本の知識人と農業の関係は、持田恵三『近代日本の知識人と農民』家の光協会、1997年。
- (3) 大島丈志『宮沢賢治の農業と文学—苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林、2013年、8ページ。
- (4) 拙稿「戦時体制下の食糧政策と統制・管理の課題」（『京都産業大学論集社会科学系列』、第35号、2018年、21～49ページ）；拙稿「宮沢賢治の科学と農村活動—農業をめぐる知識人の葛藤」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第52号、2019年、69～101ページ）。

- (5) 佐藤惣之助「十三年度の詩集」(『校本 宮沢賢治全集』第十四巻、筑摩書房、1977年、1082ページ)。
- (6) 評論家の吉本隆明(1924—2012)によれば、賢治の物語の源泉となっている感情は、弱いものの性格悲劇と、自然のなかの生物の生命維持にまつわる秩序と階層とが、からみあった場所にあるという。吉本隆明『宮沢賢治』ちくま学芸文庫、1996年、204～8ページ。
- (7) グレゴリー・ガリー著／佐復秀樹訳『宮沢賢治とディープエコロジー：見えないもののリアリズム』平凡社ライブラリー、2014年、116ページ。
- (8) アラン・ドレングソン／井上有一共編／井上有一監訳『ディープ・エコロジー：生き方から考える環境の思想』昭和堂、2001年、32～3ページ。
- (9) Tansley, Arthur G., *The Use and Abuse of Vegetational Concepts and Terms*, *Ecology*, vol.16 no.3 (1935), pp.284-307. 拙稿「自然と環境倫理—生態学の展開」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第28号、2023年、271～3ページ)。
- (10) アラン・ドレングソン／井上有一共編／井上有一監訳、前掲書、2001年、45～74ページ。
- (11) これは生きとし生けるものをつなぐという意味がある。グレゴリー・ベイトソン著／佐藤良明訳『精神と自然—生きた世界の認識論』岩波文庫、2022年。
- (12) 生態系という言葉が生まれる、その約10年前に賢治は詩や童話を通じて具体的に表現していた。賢治の描く森や鹿は、民話を語り、仏教の宇宙的な壮大さを思い起こさせるとともに、銀河ないし原子構成要素のイメージを抱かせるものである。ここには最終的に物とエネルギーによって結び付けられた宇宙がある。熊や電信線、柏の森、機関車など、賢治にとって自然とよべないものは何ひとつなかった。
- (13) ヘッケル著・後藤格司訳『生命の不可思議(上巻)』岩波文庫、1928年。
- (14) ヘッケル著・後藤格司訳『生命の不可思議(上巻)(下巻)』岩波文庫、1928年。
- (15) 宮沢賢治「青森挽歌」(『新修 宮沢賢治全集 第二巻』筑摩書房、1979年、193ページ)；宮沢賢治「ビザテリアン大祭」(『新修 宮沢賢治全集 第十巻』筑摩書房、1979年、51ページ)；小野隆祥「「青森挽歌」とヘッケル博士」(『群像 日本の作家』第12巻、小学館、1990年、266～76ページ)。
- (16) 宮沢賢治「注文の多い料理店」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、3～136ページ)。
- (17) この視点は、ドイツの生物学者・哲学者のヤーコプ・ヨハン・フォン・ユクスキュル(Jakob Johann von Uexkull, 1864-1944)の環世界説と類似である。クリサート・ユクスキュル著／日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波文庫、2005年；ヤーコプ・フォン・ユクスキュル著／入江重吉・寺井俊正訳『生命の劇場』講談社学術文庫、2012年；ヤーコプ・フォン・ユクスキュル著／前野佳彦訳『動物の環境と内的世界』みすず書房、2012年。

- (18) 拙著『農の科学史—イギリス「所領知」の革新と制度化』名古屋大学出版会、2016年、18～62ページ。
- (19) Holism とは、系（システム）全体はそれぞれの部分の算術的総和以上のものであるという考えかたである。
- (20) カール・ディートリヒ・ブラッハー「全体主義」（フィリップ・P. ウィーナー編／荒川幾男ほか日本語版編集『西洋思想大事典 第3巻』平凡社、1990年、178～83ページ）。
- (21) スティーヴン・ジェー・グールド著／仁木帝都訳『個体発生と系統発生—進化の観念史と発生学の最前線』工作舎、1987年。
- (22) ジュリア・アデニー・トーマス著／杉田米行訳『近代の再構築—日本政治イデオロギーにおける自然の概念』法政大学出版局、2008年。
- (23) スペンサーの思想はしばしば「社会ダーウィニズム」とよばれるが、ダーウィンの自然淘汰説（1859年）以前に出されたものであり、スペンサーによって独自に構想されたものであった。すなわち、自然淘汰説に基づく進化論は、ダーウィンに始まったものではない。ジョン・グリビン／メアリー・グリビン著／水谷淳訳『進化論の進化史—アリストテレスからDNAまで』早川書房、2022年。
- (24) 幡鎌正周・幡鎌さち江『人類は下り坂—丘浅次郎と「ダーウィン」邦訳の謎』私家版、2013年；長谷川智『人間を考えるヒント—ダーウィンの紹介者・丘浅次郎の知恵』羽衣出版、2020年。
- (25) 宮沢賢治「ダーウィン」（原子朗編『宮沢賢治語彙辞典』東京書籍、1989年、432～3ページ）。
- (26) 丘浅次郎「人類の征服に対する自然の復讐」（『中央公論』、1912年1月号、13～4ページ）。
- (27) 同上論文、20ページ。
- (28) ジョン・グリビン&メアリー・グリビン著／水谷淳訳、前掲書、2022年、
- (29) ドナルド・オースター著／中山茂・成定薫・吉田忠訳『ネイチャーズ・エコノミー：エコロジー思想史』リプロポート、1989年、197～205ページ。
- (30) ダーウィン著・八杉龍一訳『種の起原（上）』岩波文庫、1990年、99～103ページ。生態学と仏教とのつながりについては、Callicott, J. Baird and Ames, Roger T., eds., *Nature in Asian Tradition of Thought : Essays in Environmental Philosophy*, State University of New York Press, 1989.
- (31) Nash, Roderick Frazier, *The Right of Nature : A History of Environmental Ethics*, University of Wisconsin Press, 1989.
- (32) 斎藤文一『宮沢賢治とその展開—氷室素の世界』国文社、1976年、36～49ページ。
- (33) 興味深いことに、新渡戸稲造（1862-1933）が農業や農政学に関心をもつきっかけ

- けとなったのは、旧南部藩領（現・岩手県）内の開拓であった（新渡戸の祖父が入植した）。そこから新渡戸は札幌農学校に進学した。拙著『近代日本の農業政策論—地域の自立を唱えた先人たち』昭和堂、2012年、4～5ページ。
- (34) Barrett, Paul H., Gautrey, Peter J., Herbert, Sandra, Kohn, David and Smith, Sudney, *Charles Darwin's Notebooks, 1836-1844 : Geology, Transmutation of Species, Metaphysical Inquiries*, Cornell University Press, 1987, p.228.
- (35) ダーウィン著・八杉龍一訳『種の起原（下）』岩波文庫、1990年、262ページ。
- (36) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」（『新修 宮沢賢治全集 第十二巻』筑摩書房、1980年、91～161ページ）。
- (37) 宮沢賢治「政治家」（『新修 宮沢賢治全集 第四巻』筑摩書房、1979年、231ページ）。
- (38) 宮沢賢治「グランド電柱」（『新修 宮沢賢治全集 第二巻』筑摩書房、1979年、129ページ）。
- (39) カレン・コリガン・テラーは、賢治の「虔十公園林」「なめとこ山の熊」「よだかの星」「雪渡り」の英訳本を刊行している。
- (40) 拙稿、前掲論文、2023年、275～6ページ。
- (41) ゲーリー・スナイダー著／重松宗有・原成吉訳『野性の実践』思潮社、2011年。スナイダーは賢治の詩の翻訳者でもあった。富山英俊「ゲーリー・スナイダーの宮沢賢治」（『明治学院論叢』、第89号、1994年、1～37ページ）。
- (42) 宮沢賢治「狼森と兎森、盗森」（『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、21～33ページ）。
- (43) 同上書、22ページ。
- (44) 今西錦司『生物の世界』講談社文庫、1972年、23ページ。
- (45) Cronon, William ed., *Uncommon Ground : Rethinking the Human Place in Nature*, W. W. Norton, 1996, p.25.
- (46) Heisenberg, Werner, *Physics and Philosophy : The Revolution in Modern Science*, Allen & Unwin, 1959.
- (47) 小森陽一『最新・宮沢賢治講義』朝日選書、1996年、38ページ。
- (48) 同上書、42ページ。
- (49) 丘浅次郎『進化論講話』有精堂出版、1967年、338～67ページ。
- (50) Foster, John Bellamy, *Marx's Ecology : Materialism and Nature*, Monthly Review Press, 2000, pp.123-6.
- (51) 古川賢『森林で何が起きているのか—気候変動が招く崩壊の連鎖』中公新書、2022年。
- (52) Levins, Richard and Lewontin, Richard, *The Dialectical Biologist*, Harvard University Press, 1985, p.55.
- (53) ダーウィン著・八杉龍一訳『種の起原（上）』岩波文庫、1990年、19～63ページ。

ダーウィンは飼育栽培のもとでの変異から『種の起原』を書き始めている。

- (54) 同上書、87 ページ。
- (55) ゲーリー・スナイダー著／重松宗育・原成吉訳、前掲書、2011 年。
- (56) 高槻成紀『都市のくらしと野生動物の未来』岩波ジュニア新書、2023 年、179～84 ページ。
- (57) 宮沢賢治「狼森と箕森、盗森」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980 年、24 ページ)。
- (58) 農耕の開始とともに、文明が築かれていったと説明されることが多いが、それは一方で森林の破壊でもあった。デイビッド・モントゴメリー著／片岡夏実訳『土の文明史—ローマ帝国、マヤ文明を滅ぼし、米国、中国を衰退させる土の話』築地書館、2010 年；ヨアヒム・ラートカウ著／山縣光昌訳『木材と文明』築地書館、2013 年。
- (59) 拙稿、前掲論文、2023 年、273 ページ。
- (60) 宮沢賢治「狼森と箕森、盗森」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980 年、26～7 ページ)。
- (61) Knight, John, *Waiting for Wolves in Japan : An Anthropological Study of People-Wildlife Relations*, Oxford University Press, 2003, p.193；高槻成紀『野生動物と共存できるか—保全生態学入門』岩波ジュニア新書、2006 年。
- (62) 千葉徳爾『オオカミはなぜ消えたか』新人物往来社、1995 年、183 ページ。
- (63) 野本寛一『熊野山海民俗考』人文書院、1990 年、66 ページ。
- (64) 狼は、アルネ・ネスの「全体的ビジョン」の象徴となり、より高度な客観性のある言語を話すとされる。グレゴリー・ガリー著／佐復秀樹訳、前掲書、2014 年、168 ページ。
- (65) 野本寛一「心意のなかの動物」(赤田光男ほか編『講座 日本の民俗学 4 環境の民俗』雄山閣、1996 年、224 ページ)。
- (66) 狼の再導入の是非に関して、日本では現在、アンケート調査の実施にとどまり、実行には移されていない。
- (67) Knight, John, *op.cit.*, 2003, p.209.
- (68) 野生動物による被害、とくに作物被害は「獣害」とされる。祖田修『鳥獣害—動物たちと、どう向きあうか』岩波新書、2016 年)。近年、獣害を防ぐ目的で、牛などの大型動物を休耕地で放牧する試みなども行なわれている。この試みは生態学的バランスの回復といえないまでも、テリトリーを守るという動物独特の習性を生かしたものである。
- (69) 拙稿、前掲論文、2019 年、69～101 ページ。
- (70) コンラッド・タットマン著／熊崎実訳『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書院、1998 年、100～47 ページ。

- (71) 樋口清之『日本木炭史』講談社学術文庫、1993年；福宿光一『論集日本の木炭生産地域—100年の足跡』農林統計協会、2021年。
- (72) 三戸幸久「ニホンザルの分布変遷にみる日本人の動物観の変転—東北地方の場合を例に」(河合雅雄・植原和郎編『講座 文明と環境 8 動物と文明』朝倉書店、1995年、93～4ページ)。
- (73) 河合雅雄「宮沢賢治の動物の世界—序章」(河合雅雄・植原和郎編『講座 文明と環境 8 動物と文明』朝倉書店、1995年、19ページ)。
- (74) 河合雅雄、同上論文、1995年、16ページ。
- (75) Knight, John, *op.cit.*, 2003, p.30.
- (76) *ibid.*, p.1.
- (77) コンラッド・タットマン著／熊崎実訳、前掲書、1998年、23ページ。
- (78) 宮沢賢治「鹿踊りのはじまり」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、121～36ページ)。
- (79) 同上書、133ページ。
- (80) 佐藤伸郎「宮澤賢治の文学—第四次についての考察」(『年報人間科学』、第36号、2015年、69～87ページ)。
- (81) 拙稿、前掲論文、2019年、69～101ページ。
- (82) 宮沢賢治「六月二十五日 保阪嘉内あて封書」(『新修 宮沢賢治全集 第十六巻』筑摩書房、1980年、195ページ)。
- (83) 宮沢賢治「農民芸術の興隆」(『新修 宮沢賢治全集 第十五巻』筑摩書房、1980年、18～22ページ)。
- (84) 井上克弘「土壌肥料と宮沢賢治—ベドロジスト、エダフォロジストとしての賢治」(『日本土壌肥料学雑誌』、第67巻2号、1996年、206～12ページ)。
- (85) マロリ・ブレーク・フロム著／川端康雄訳『宮沢賢治の理想』晶文社、1984年。
- (86) 宮沢賢治「羅須地人協会関係稿」(『新修 宮沢賢治全集 第十五巻』筑摩書房、1980年、477～531ページ)。
- (87) 宮沢賢治「狼森と筑森、盗森」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、27ページ)。
- (88) 同上書、29ページ。
- (89) Levins, Richard and Lewontin, Richard, *The Dialectical Biologist*, Harvard University Press, 1985.
- (90) 鈴木正彦・末光隆志『「利他」の生物学—適者生存を超える進化のドラマ』中公新書、2023年。
- (91) 宮沢賢治「狼森と筑森、盗森」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、29ページ)。
- (92) Knight, John, *op.cit.*, 2003, p.244.

- (93) Morris, Brian, *The Power of Animals : An Ethnography*, Oxford, UK, 1998, p.120.
- (94) 宮沢賢治「狼森と笹森、盗森」(『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房、1980年、32ページ)。
- (95) 同上書、33ページ。
- (96) Foreman, Dave, *Confessions of an Eco-Warrior*, Harmony Books, 1991, p.65. 黒田純一郎「スピリチュアリティに基づいた環境保護活動の形態的特徴—ディープ・エコロジー運動を事例として」(『東京大学宗教学年報』、第31号、2014年、121～42ページ)。
- (97) Cronon, William ed., *op.cit.*, 1996, pp.83-4.
- (98) 小塩和人「アメリカ環境史の回顧と展望」(『西洋史学』、第224号、2006年、317～33ページ)；菅井大地「アメリカン・ウィルダネスへのアンチテーゼ—ケルアックの精神的荒廃と自然描写」(『英文学研究 支部統合号』、第11号、2018年、301～10ページ)。
- (99) 賢治は「装景」という言葉も使っている。鈴木誠「宮沢賢治のとらえた「造園家」と「装景家」」(『ランドスケープ研究：日本造園学会誌』、第60巻5号、1997年、421～4ページ)。
- (100) 武内和彦『環境創造の思想』東京大学出版会、1994年。
- (101) 小坂国継『環境倫理学ノート—比較思想的考察』ミネルヴァ書房、2003年、157～75ページ)。
- (102) 森岡正博「ディープエコロジー派の環境哲学・環境倫理学の射程」(『科学基礎論研究』、第21巻2号、1993年、27～32ページ)。
- (103) アラン・ドレングソン／井上有一共編／井上有一監訳、前掲書、2001年、32ページ。先進国を中心に、人間によって形成される「疑似自然」が多くみられる。疑似自然を人間と野性の間でどのように位置付けるのかが問題である。
- (104) ローカルナレッジの展開については、拙著、前掲書、2016年。